

《2008年2月例会報告》

【日時】2008年2月27日(水)19:00~21:00(その後「ルン」~0:10頃)

【会場】筑波大学附属高校3F会議室(東京都文京区大塚1-9-1)

【テーマ】東京都からみた日本のフットサルのこれまでとこれから

【報告者】野口良治((財)東京都サッカー協会事務局)

【参加者(会員)12名】阿部博一(R&A) 牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会) 菊池正史(RATOKYO) 木口理恵(朋優学院高等学校) 三枝敏洋(東京ガス(株)) 高田敏志(町田高ヶ坂SC) 高橋誠(東京都サッカー協会フットサル運営部) 田中俊也(三日市整形外科) 中塚義実(筑波大学附属高校) 野口良治((財)東京都サッカー協会事務局) 藤田直樹(ビバ!サッカー研究会) 両角晶仁(totoプロデューサー)

【参加(未会員)8名】伊藤貴美子(朋優学院高等学校) 川前真一(スポーツリンクアンドシンク) 国島栄市(ビバ!サッカー研究会) 袴田正和(ビバ!サッカー研究会) 速水高志(筑波大学附属高校) 馬場政行(ヨココムフットサルクリニック担当) 平野諒(ビバ!サッカー研究会) 峯山典明(府中アスレティックFC)

注) は初回参加のため参加費無料

【ルンからの参加者】北原由・白髭隆幸(高校サッカー年鑑編集部)

【報告書作成者】室田真人(中央大学大学院)

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書はあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

東京都からみた

日本のフットサルのこれまでとこれから

報告者:野口良治((財)東京都サッカー協会事務局)

中塚:本日のテーマは、「東京都からみた日本のフットサルのこれまでとこれから」です。東京都サッカー協会(TFA)でずっとフットサルに携わられてこられた野口さんの報告です。よろしくお願ひします。

第1部 野口良治氏による報告

自己紹介

野口良治と申します。出身地は青梅市で、生年月日が1973年3月3日です。ジーコとストイコビッチと同じ誕生日ということが自慢です(笑)。家族は、妻と、子どもが1人います。子どもは1歳6ヶ月にやっとなりまして、最近、ご存じかどうか分かりませんが、NHK教育テレビのピタゴラスイッチにはまっています。

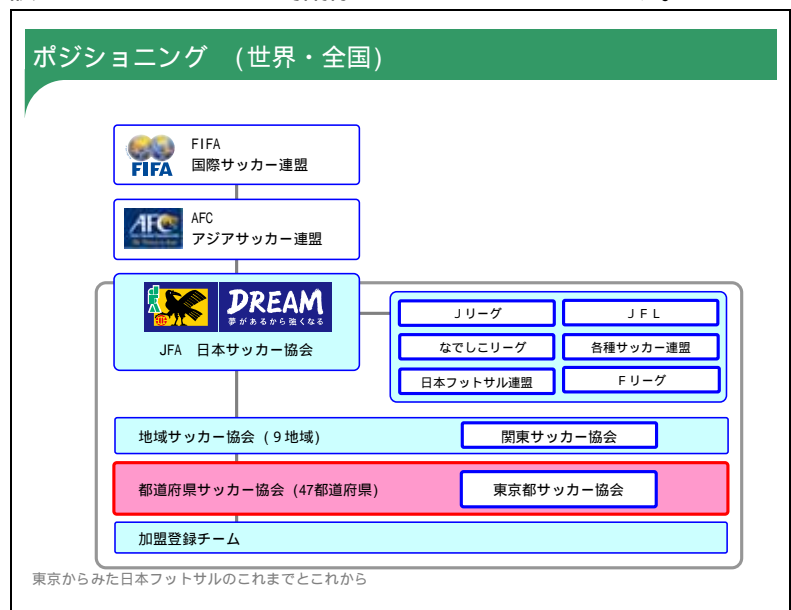
国士館大学を出まして、1個Jクラブをかじって、今に至っています。現職の理由としては、大学のときに、大学サッカー連盟の幹事をしておりまして、連盟の活動がきっかけで、95年から現職に就

いております。主に「事業系」と我々は言うておりますが、フットサルの大会の企画・運営を担当しています。今までにやったことは、東京で開催される各種大会の運営ということで、代表戦とか天皇杯、日本選手権、Fリーグなどというのをさせていただきました。あと、2002年のワールドカップのときには長居スタジアムで仕事をしていました。また、2005年から行われているクラブワールドカップも作業させていただいております。日本サッカー協会のホームページ (<http://www.jfa.or.jp/fanzone/interview/071212/page1.html>) に、インタビューが載っていますので、そちらの方を見ていただくのもいいかもしれません。

はじめに

内容に入る前に、お詫びとお断りをさせていただきます。10年以上前の話がいろいろと出てくるのですが、協会では資料は5年間しか取っておかないという内規があるため破棄されたものも多く、個人の記憶に頼っている部分が多分にあります。関係者にも十分伺ってはいるのですが、間違っている部分も出てくる可能性がありますので、誤りがありましたらご指摘いただきたいと思ひます。

それと、今日お話しするところは「東京都サッカー協会の中のフットサルからみた日本のフットサル」ということです。その位置づけは、まず大きなところで FIFA があって、その下にアジアサッカー連盟があります。日本サッカー協会 (JFA) には、Jリーグをはじめとする各種全国の連盟があって、日本協会の下に9地域サッカー協会があります。東京だと関東サッカー協会が統括をしております。それで、私どもの都道府県サッカー協会があります。これを頭に置きながらこれからのお話しをお聞きいただきたいと思ひます。



フットサルとは？

まず最初にフットサルとは何かということ。もともとスペイン語でフットボール・デ・サロン (fútbol de salón) というのが室内で行われるサッカーの名称で、それを簡略化した単語ということになっています。ただ、この名称の正式な由来はどこをみても載っていません。日本フットサル連盟のハンドブックにこのように紹介されています。

フットサルのルーツとして、世界の中でいろいろあったんですが、大きく分けると2つあります。サロンフットボールと、インドアサッカーです。

1) サロンフットボール

サロンフットボールは、ジョアン・カルロス・セリアーニ (ウルグアイ・YMCA) によって1930年に考案され、南米を中心に、弾まないボールを使って行われていました。1961年に創立された国際サロンフットボール連盟というのが今でもあるらしいんですが、実態はよく掴めていません。今でもワールドカップをやっているそうです。

ボールは、弾まないものを用います。どういうボールかという、3号球くらいの大きさのボールです。重さが470~500グラム、中にゴムの層があって、そこが厚くなっています。半球のものを2つパカッと合わせて作るそうです。ですので、大袈裟ですけど鉛のボールを蹴っているような感覚で

す。ルール上は、2メートルの高さからボールを落下させて、1回目のバウンドが30センチ以下、2回目のバウンドは10センチ以下ということですが、実際はそんなに弾みません。20メートル、30メートル上げるとそれなりに弾むかもしれませんが、実際のところ、落としてもこれだけしか弾みません（実際にボールを落としてみる）。普通のフットサルボールは（実際にボールを落としてみる）これも弾まないようにできていますけど、これだけ弾みます。サッカーボールを蹴っていた人がいきなりサロンフットボールのボールを蹴ったら足を痛めてしまうかもしれません。フットサルのボールの方が少し大きいのですが、重さはフットサルボールの方が軽くできています。フットサルのボールは中に詰め物があって、メーカーさんによっていろいろあるんですけど、今日持ってきたボールは実際にFリーグで使われているボールで、おそらく中にスポンジだとか綿が入っているものだと思います。メーカーさんによっては、中にスポンジを入れたりとか、工夫をされて弾まないようなボールを作っています。というのがサロンフットボールでした。

フットサルのルール	
<p>・サロンフットボール</p>  <p>サイズ 外周53～57cm 重さ 470～500g 2mの高さから落下させた時、 1回目のバウンドが30cm以下、 2回目のバウンドが10cm以下。</p>	<p>・フットサルボール</p>  <p>サイズ 外周62～64cm 重さ 400～440g 2mの高さから落下させた時、 最初のバウンドが50～65cm。</p>
東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから	
12	

2) インドアサッカー

インドアサッカーはイギリスが発祥で、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなど、特に英語圏で主に広まっていったスポーツです。名称がいろいろあって、アメリカはインドアサッカーと言っています。サッカーとかフットサルはフットボールですので、普通はフットボールとしか言わないのですが、アメリカやオーストラリアはサッカーという言葉を使うようです。ですから日本もアメリカ英語が入ってきてサッカーと呼んでいます。

インドアサッカーは、アイスホッケーのように周りに壁があって、ボールは実際のサッカーボールを使うらしいのですが、壁にあてて一人でワンツーリターンをしたり、ゴール前で壁にあててオーバーヘッドでシュートを決めたりする人がいるそうです。

スペインは「フットボールデサラ」といってフットサルに近いんですけど、つい最近変わったんですが、フットサルをしながらもキックインではなくスローインでやっていたり、キックインでもコーナーキックと同じような戦術的な使い方をして国内限定で行われています。

ドイツでは「ハーレンフースバル」と呼んでいて、これはブンデスリーガの選手が、オフシーズンや、雪が降って外でできないとき、クリスマス休暇のときに、テレビに出て楽しむようなものだそうです。リトバルスキーが以前インタビューで言っていたのですが、スライディングタックルもOKなので、怖くてしょうがない。ただ、ギャラを貰っているので出なければいけないと。ゴールも少年ゴールくらいの大きさで、人工芝で観客が入った中でやっています。

イタリアは「カルチェット」と呼んでいて、芝生の上でやるスポーツです。あと「ザール」という、オランダでやっていたものがあります。体育館でやるフットサルに近いものだそうです。

これらがインドアサッカーの紹介です。

世界と日本のフットサルのあゆみ

東京の話に入る前に、世界・日本のフットサルということで、どういうルーツで来たかということころを辿っていききたいと思います。

1) 日本におけるフットサルの始まり

日本ミニサッカー連盟は 1977 年に設立されます。この前に「ミニサッカー選手権大会」が開かれていて、サッカーの日本リーグのチームが出てやっていました。私はこの頃はまだ幼いので全然記憶にありません。

ミニサッカー日本代表を編成して、国際大会に 3 回出場しています。1 回目は 1982 年にブラジルに行つて、第 1 回世界サロンフットボール選手権大会に出ています。日本はこのとき 9 位だったそうです。その後、1985 年にスペインで行われた第 2 回大会にも出場し、グループリーグで敗退。1988 年にオーストラリアで行われた第 3 回大会でもグループリーグ敗退となっています。

国内では「全国少年総合ミニサッカー大会」というのが行われていました(第 1 回は 1979 年)。サロンフットボールだけでなく、ガーデンフットボールやミニサッカーの総合的な順位を争う大会だったそうです。1985 年からは形を変えて、全国選抜サロンフットボール大会として、今も行われています。

2) FIFA の登場

ここで FIFA が登場します。1985 年の FIFA 理事会で、5 人制サッカーに関する小委員会を設置することが決定されました。先ほど申し上げたように、サロンフットボールやインドアサッカーのいろんなルールがあったので、それをまとめることが目的でした。1986 年に FIFA の小委員会は成案を示し、ルールを作ったんですけど、実際にこれでできるかどうかをハンガリーとブラジルとスペインで試行したそうです。1987 年にファイブ・ア・サイド・フットボールというように名前を変えて、委員会を設置しました。1988 年に競技規則が制定され、発効しました。このときの FIFA 会長は、ブラジル人のジョアン・アベランジェでした。彼は競技規則の序文でこういうコメントされています。

「この完成された仕事は大きな誇りであり、5 人制サッカー競技規則の初版を出版することは大きな喜びである。まさに歴史的な瞬間である。」

見方によれば、アベランジェがサッカーのみならず、同じフットボールを FIFA が統括するんだということで、政治的権力を使って持っていったというような話もあります。

その後 1989 年に、第 1 回ファイブ・ア・サイド・フットボール世界大会が始まりました。第 1 回はオランダで開かれました。出場は 16 カ国で、日本代表はまたグループリーグで敗退します。このときの監督は、当時本田技研の監督をされていた宮本征勝さん(のちに鹿島アントラーズ監督)で、コーチが奥寺康彦さん。奥寺さんは先ほどの「ハーレンフースバル」をやった経験があるのでコーチになったということです。選手としては、後に日本代表のキャリアを持つ勝矢寿延、倉田安治、北沢豪などがいました。1992 年に第 2 回が行われますが、このとき日本は東アジア予選で敗退しました。

この後 1994 年に FIFA が、ファイブ・ア・サイド・フットボールからフットサルというように名称を変えて、競技規則を制定します。その後、世界的な広がりを見せて、日本協会もこれに則って加盟協会であるので取り組みを開始します。

3) 日本におけるフットサルの始まり

ここからが日本に入ってくるところです。JFA の中にはミニサッカー委員会があったのですが、フットサルとして名前が入ってきたところで、名前をフットサル委員会と変えて作業を始めました。当時の委員長が、今でも十条 FC で総監督をされている榮隆男さん(任期 1994~2004)。女子美術大学の教授で、かなり熱心に全国を回られていた方です。

1995 年に JFA から、全国展開するために、まず都道府県サッカー協会の中にフットサル担当者を置いてくれという依頼がいきなりやってきました。先ほど申し上げた通り、私が入ったばかりのころで、上司と一緒にやっていたんですけど、私がいきなり担当になったわけではなくて、別の方を選任

してやろうということで、事務局員ではなくて専門の方を出しました。他の県は担当者だけだったんですけど、いずれは専門委員会を置いてやるという将来的な話があったので、東京都の場合は委員会を立ち上げてしまおうということで話を進めました。

全国大会を3つ行うので、その予選をしてくださいというのが、JFAからの通知でした。3つというのは、1つは全日本フットサル選手権大会という16歳以上の大会、2つ目は全日本ジュニアユースフットサル大会という中学生年代の大会、そして3つ目が全日本少年フットサル大会です。少年大会は以前から行われていたもので、他の2つはこのときできた大会です。

こうして地域と都道府県内での活動が始まりました。

4) 全日本フットサル選手権大会を開催するにあたって

全日本フットサル選手権大会が、これまでの活動の中で根幹となっている大会です。全国大会を開催するにあたって、最初の頃は、いまみたいに代々木競技場とか駒沢競技場は取れませんでした。そのため、テニスで有名な有明コロシアムで、フロアの上に人工芝をひいて開催しました。資料に載せていませんが、これは1994年に国際フットサル大会があったときに、イタリアで開催され、イタリアは「カルチェット」が主なので、試合を人工芝の上でやるのが通常だったようです。それに倣って人工芝でやったという次第です。

地域大会(関東大会)は千葉が当番でした。東邦大学の秋田先生がフットサル委員長で、千葉県総合運動場で行われました。東京はどうしたかということ、やることも分からない、やる場所も分からない。ということで、まずすでに場所ができていた民間のフットサル場に行って予選リーグをやりました。ミズノフットサルプラザ二子玉川です。そこで勝ち上がったところが、今はスポーツ科学センター(JISS)になっている西が丘の競技場の体育館で行いました。これが第1回でした。

東京のフットサル

1) フットサル委員会と全日本フットサル選手権大会実施委員会の設置

1995年に、各都道府県にフットサル担当者を置いてくれという話が来たときに、東京都サッカー協会では全く取り組みはありませんでした。当時成城大学にいらした小野剛さんが、ファイブ・ア・サイド・フットボールの研修会を受けた経験があったということで委員長に選ばれました。小野さんはいま、日本サッカー協会の技術委員長をされていて、オシム問題ですとか、岡田武監督を採用するときによく出ていた方です。筑波大学のOBで、中塚さんの1級下です。

委員はサッカーの連盟から出ただけ、さらに審判委員会から出してもらってフットサル委員会を構成しました。中塚さんはこの頃からのメンバーです。中塚さんがフットサル委員になったいきさつも面白いんですが、ここでは触れないで通過します。どの方も、「こんな委員会をつくったから行ってきて」という軽いノリでいらしたような会でした。

1995年、時を同じくして全日本フットサル選手権大会の予選をやらなければならないので、その実施委員会を併せて作りました。こちらも1種と2種のカテゴリーが対象となるので、社会人、大学、専門学校、及び2種もカテゴリーなので中塚さんにも入っていただきました。審判委員会からと、あと幹事として事務局から2人です。私の名前はございません。その下でセカセカと動いていました。こういうメンバーで構成をしました。

東京におけるフットサルの始まり

(1995年)

フットサル委員会の設置

委員長	小野 剛	*初代メンバー (成城大学) *現JFA技術委員長
委員	石川 治夫	(第1種・社会人連盟)
	玉井 朗	(第1種・大学連盟)
	青木 伸彦	(第1種・専門学校連盟)
	中塚 義実	(第2種)
	木村 正人	(第3種)
	清水 文衛	(第4種)
	梶野 政志	(審判)
	尾崎 良一	(審判)

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

24

2) 第1回全日本フットサル選手権大会東京都大会

それで1995年12月、寒風吹きすさむ寒空の中で大会をやりました。ミズノフットサルプラザ二子玉川はフットサルをやる場所なんですけど、大会をやるには無理があるところでした。テニスコートの横にあったんですけど、雨が降ったらどうしようと思ってテントを張りました。お金をかけて。そこそこの値段がしたのを覚えているのですが、そしたら天気になってしまい、逆にテントを張ると日陰になって寒くて入らないという、全く意味がないというようなこともありました。その後西が丘に場所を移して、最終的に代表チームを決めました。参加は29チーム。すべてサッカーの加盟チームで、フットサルだけやっているというチームは当時出られないという状況でした。

東京におけるフットサルの始まり

(1995年)

全日本フットサル選手権大会実施委員会の設置 *初代メンバー

実施委員長	石川 治夫	(第1種・社会人連盟)
実施委員	玉井 朗	(第1種・大学連盟)
	嶺岸 浩二	(第1種・社会人連盟)
	大江 祐司	(第1種・社会人連盟)
	荻野 久憲	(第1種・社会人連盟)
	青木 伸彦	(第1種・専門学校連盟)
	小田切 敦	(第1種・専門学校連盟)
	藤崎 礼二	(第1種・専門学校連盟)
	中塚 義実	(第2種)
	梶野 政志	(審判)
	尾崎 良一	(審判)
幹事	清水 眞事	
	渡辺 真人	

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

25

3) フットサル開始当初の問題

始めた当初の問題点は大きく分けて3つありました。

「ルールがよく分からない」。今みたいに図解とか絵も入っていないルールブックで、文字だけなんです。それを頼りに審判委員会の方で解説をして、ルールを展開してやっていたんですけど、かなりドギマギしながらやっていました。当時は、チャージは認められないという解釈があったので、バスケットみたいになるべく接触しない、ネバータッチの試合ばかりで、ファールの笛が鳴らない試合中にはありました。

次に「場所が少ない」ことです。今のように体育館の開放も進んでおらず、民間施設も少ないんです。二子玉川が、東京でできた2つ目か3つ目の施設です。3面並んでいる施設は当時そこしかなく、29チーム同時で2日間かけてグループリークをやるとうすると、そこを借りてやらざるを得ないことがありました。

あと「設営方法が分からない」ということがありました。西が丘ではフロアにラインテープで、直線や曲線を貼らなければならず、当時は真っ直ぐは引けても曲線を引く技術がなかったわけですから、どうやっていいのか…。カクカクしながら始めていました。

というような当初のところ、実態はあまり分からないのに、とりあえずやってみたというような状況でした。

4) フットサルの活動コンセプト

このときから、「いつでも、どこでも、だれでも」がフットサルの合言葉のようなもので、全国的に普及しようというのが一つありました。普及性ということで、1チーム5人でできる「参加しやすさ」があっていいでしょうということと、「小スペースでプレーできる」という、この3つがキャッチフレーズでした。当時、普及性のところで考えると、レジャー志向、遊びっぽく、楽しくやるというのが先行し、どうしても大会で競技規則、

フットサルの活動コンセプト

- いつでも どこでも だれでも
- 参加しやすさ (5人で1チーム)
- 小スペースでプレーできる

普及性

競技性

- レジャー
- 遊び
- 楽しく

- 競技規則
- 真剣勝負
- 厳しく

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

28

ルールを上手く運用したり、勝負事になってくるので細かいことを言ったり、ユニフォームを細部まで規制して用意させたり。厳しくやらせなければならないけど、厳しすぎるとついていけないということで、かなりギャップのある状況でした。これは今でもユース年代以下の東京の大会では、その辺りについて、どこにラインを引くかを手探りで始めながら、今のところで落ち着いている状況です。

5) 登録制度

先ほど申し上げた第1回的时候は、サッカーの加盟登録していないとフットサルの大会に出られませんかというような制度でした。これでは普及はしないだろうというのがJFAフットサル委員会の結論で、それを打破するために「フットサル大会登録制度」を作りました。サッカーの加盟登録制度に頭がこびり付いていたこともあって、浸透するのに時間がかかったんですけど、当時としては画期的なルールでした。これは、年間を通した登録ではなく、大会毎の登録です。大会に参加登録するのと同じ作業の中で登録作業をしてもらって、事務手続きを完了してしまうというやり方です。これは今でも行われているもので、登録費に関してはチーム単位のみで、個人については登録費を徴収しないというものです。当時東京ですと全日本選手権で5,000円、そのほかの大会が2,000円です。

サッカーからすると非常に安いんですけど、そのような手頃な値段です。「フットサルだから！」というのをよく言われたのを覚えています。

簡単にどんなものだったかということをご紹介すると、右側にある書式が、よく役所にあるような、3枚複写式のものになっていて、1枚目がJFAの控、2枚目が都道府県協会の控、3枚目がチームの控になっていまして、カーボンで書けるようになっていて、この1枚をチームに登録料で買ってもらったことをやっていた。現在は少し書式が変わっているのですが、コピー用紙にこれをただ印字している、ということをやっています。今後は時代の流れに沿ってWEB化するのではないかと思います、まだそこまで至っていません。現場で参加申し込みをするような仕組みを取るようなやり方なので、これから紙ベースでやっていくのはしばらく続くのではないかと現場で思っております。

6) 梶野政志フットサル委員長の就任

このころすでに小野さんはサンフレッチェの強化スタッフになって、実際のところ1年でいなくなっていました。その後事務局長の清水が代行で1年半ぐらい委員長をしていたんですけど、1997年度より梶野政志委員長が就任して現在に至っています。

梶野委員長が就任してやったことは「リーグ戦の創設」と「各年代カテゴリーの活性化」です。リーグ戦は16歳以上で、全日本選手権の対象になっているチームを、年間通じて活動できるような場を作ろうということです。また、各年代カテゴリーの活性化としてはまず、三枝さんが女子担当委員として委員会に入られ、東京都女子フットサル大会をはじめました。2種はこれまで大会がありませんでしたが、2001年度からU-18大会を年2回行うようになりました。3種も全国大会の予選だけで、年に1回だけだとプレイヤーはなかなか増えないだろうということで、もう一つ大会を作って、現在のような夏と冬に大会を行う形式になりました。

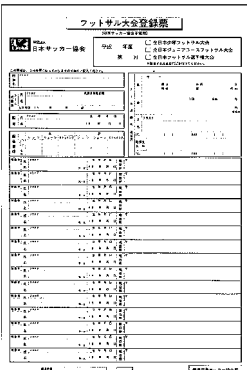
全日本フットサル選手権大会とリーグ戦の関係を簡単に表にまとめてみました。最初、全日本選手

フットサル大会登録制度

•制度開始当初のフットサル大会登録票

3枚複写式
JFA控
都道府県協会控
チーム控

1シートを金券として扱う
現在はコピー用紙
今後はWEB化?



東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

30

権は 29 チームで、回を追う毎に、若干ですが参加チーム数は増えていきます。2002 年の後から下降気味になっているのですが...

第 4 回までやったところから東京都フットサルリーグを始めました。このときは 8 チームで、全日本選手権の上位チームに声がけをしてはじめました。まずは内輪に声をかけて基盤を作ってから展開していこうという考えで、3 年間据え置きでやってみて、4 年目から拡大しようということです。2001 年から 47 チームになっているのはそのような理由によるものです。8 チームの中には、府中水元クラブ、東京学芸大学、小金井ジュールという、当時の都大会で上位に入っているようなところに入っていました。

現在、東京都フットサルリーグは 130 チームになっており、1 部から 3 部と、オープンリーグとって 4 部に相当するリーグと女子リーグがあります。あと大学がありますね。

このような組織形態を取るまでに至っております。

7) フットサル連盟創設

2000 年度には、サッカー協会の傘下にある組織として東京都フットサル連盟を創ろうという計画が出てきます。ここで足踏みをするんですが、設立まで 3 年かかりました。サロン 2002 のフットサルプロジェクトが活動したのはこの時期です。これはフットサルプロジェクトの第 1 回だったんですけど、「東京都フットサル連盟をめぐって」ということで、私もメンバーに加わっているいろいろと話を進めていきました。最後は中塚さんにまとめていただき、サロン 2002 としての答申をして終わるというものでした。これに関しては、会員歴の長い方はご記憶にあるかと思います。

連盟設立に時間を要した理由として、サッカー協会とどのような位置関係でやっていくのかというところがあったと思います。ボトムアップでやっていくという考えのもと、東京都のフットサルを統轄する団体を設立するというのが規約案に盛り込まれていたところ、「統括するのはフットサル連盟ではなく、東京都サッカー協会だろう」ということを、うちの上役から言われました。このような経緯があったので、それが今も残っています。今の形態は間違っていなかったなと自負しております。

そのときの棲み分けの基本的な考え方は、協会としては制度や政策を考える、連盟は日常に実行するというものです。

全日本フットサル選手権大会とリーグ戦

年	全日本フットサル選手権大会東京都大会			東京都フットサルリーグ		
	回	チーム数	開催状況	回	チーム数	開催状況
1995 (平成 7 年)	第 1 回	29	一般公募のみで開催	-		
1996 (平成 8 年)	第 2 回	32	区市町村協会 / 連盟選出チーム枠を設定	-		
1997 (平成 9 年)	第 3 回	59	府中市立総合体育館等、全試合を体育館にて開催	-		
1998 (平成 10 年)	第 4 回	72		第 1 回	8	全日本選手権大会上位チームなどによりスタート
1999 (平成 11 年)	第 5 回	76		第 2 回	10	
2000 (平成 12 年)	第 6 回	107	民間施設予選を導入	第 3 回	9	
2001 (平成 13 年)	第 7 回	137		第 4 回	47	オープンリーグを設立
2002 (平成 14 年)	第 8 回	111		第 5 回	75	2 部リーグ設立し、ピラミッド型リーグを形成
2003 (平成 15 年)	第 9 回	123		第 6 回	92	東京都フットサル連盟設立 女子リーグ設立
2004 (平成 16 年)	第 10 回	129		第 7 回	122	
2005 (平成 17 年)	第 11 回	109		第 8 回	102	
2006 (平成 18 年)	第 12 回	97		第 9 回	133	

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

33

委員会と連盟のすみ分け

委員会

連盟

基本的な考え方

政策・制度を考える

日常実行する

実施事業

都選手権の開催
普及育成事業

加盟チームを対象にしたリーグ戦、
カップ戦
選抜チームの活動

加盟・登録団体

大会登録制度によりいつでも対応

加盟チームのみ

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

35

事業ベースで言うと、東京都の選手権を開催するのは委員会の方で、普及・育成事業、ユース以下の年代だとか女子の大会はこちらの方でやるという理解で当時始めました。連盟としては加盟チームを必ず持って、それを対象にリーグ戦やカップ戦をやるという考え方です。これは当たり前の話ですけど、フットサル専門でやるチームの組合的な組織が連盟であるというような考え方です。これは、サッカーの連盟も同様で、全く新たに考えたものではなくて、旧来の競技団体の考え方もあります。

確か、サロンのフットサルプロジェクトだとそうではなく、21世紀型のもっと開けたものを創ろうと話をしながらいろんな意見が出て、活発だったということをお記憶しております。詳しくは報告書がありますので、別途ご覧いただけたらと思います。

それで、加盟登録団体は、先ほどの大会登録制度によって、いつでもだれでも来ていいですよというような仕組みでした。連盟としては、年度初めに会員を限定するやり方で加盟チームを募って、その人を対象に活動していくというような組織形態です。

8) JFA キャプテンズ・ミッション

2003年、ワールドカップが終わって、川淵キャプテンが就任されて、ここでキャプテンズ・ミッションというのがいきなりガーンと出ました。当時はミッション1から10まで(M1:「JFAメンバーシップ制度」の推進 M2:施設の確保・活用 M3:「JFAキッズプログラム」の推進 M4:中学生年代の活性化 M5:エリート養成システムの確立 M6:女子サッカーの活性化 M7:フットサルの普及推進 M8:リーグ戦の推進と競技会の整備・充実 M9:地域/都道府県協会の活性化 M10:中長期展望に立った方針策定と提言 M11:スポーツマネージメントの強化 2007年に追加)出ていまして、フットサルとしては、M1のメンバーシップ推進と、M7のフットサルの普及推進というのに関わっています。

9) 個人登録制度

ここで初めて個人登録というものが出てきます。これまでは先ほど申し上げた通り、チーム登録だけだったのですが、ここでJFAのサッカーファミリーを200万人にしようという目標が掲げられたので、フットサルもこの一翼を担おうということで個人登録制度が始まりました。高校生以上で登録費が1,000円、中学生以下が500円というもので、年度毎の登録で、選手証が1人ずつ発行され、名前と生年月日が印字され、登録番号も出ています。試合の時にこれを持って行って、持っていないと出場できませんよというような運用を始めました。かなりコストを下げていて、ペラペラな選手証が来ます。審判やサッカーの選手証からするとちょっとコストが下がったものになっていました。

2003年に始めた当時の全体の登録人口は約95,000人でした。東京は約5%、5,000人に満たないくらいでした。

1番は北海道で17,000人くらいいます。2位が兵庫で東京は3位でした。以降徐々に伸びていくんですが、120,000人でほぼ止まってきている状況です。微増しているところは各種機会を増やしているからかなというように感じています。そのような状況になっており、東京は依然として5%

個人登録制度

・フットサル個人登録人口の推移

年度	日本			東京 (全国比)		
	一般	15歳以下		一般	15歳以下	
2003年度	95,267人	36,210	59,057	4,881人 (5.12%)	3,241	1,640
2004年度	101,250人	39,343	61,907	5,045人 (4.98%)	3,307	1,738
2005年度	120,394人	52,789	67,605	6,659人 (5.53%)	4,763	1,896
2006年度	124,017人	55,106	68,911	6,570人 (5.30%)	4,303	2,267
2007年度	127,049人	57,851	69,198	6,869人 (5.41%)	4,430	2,439

登録年度は、4月～翌年2月まで

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

38

くらいをさまよっているような状況です。全体の登録人口が、サッカーですと120万人くらいいますので、約1割くらいです。日本の人口が1億2,000万人ですから1/1,000くらいですかね。それくらいしか登録者はいません。メリットとしては、試合に出られる、フットサルの代表戦だとか、全日本選手権の時に、先着で入れるという程度しかない状況で、会員制度というにはちょっと寂しいところ です。

10) フットサル民間施設の台頭

最初に申し上げた、プレーする場所がないという問題ですが、この頃から施設があちこちでできる

ようになりました。公共の体育館は開放されていないものが多く、当時は民間施設でやるのが常でした。次のスライドは、日本フットサル施設連盟のホームページから抜粋（<http://www.j-futsal.net/>）したものですけど、2006年までの統計調査で、全国に529のフットサル施設があるそうです。東京の立地条件で、都内で土地を買ってそんなものを作ったら、莫大なお金が必要だと思わ なんですけど、サッカーと違って狭いスペースでできます。写真は渋谷駅の屋上にあるアディダス・フットボールパークですけど、あのようにデ

パートの屋上を有効に利用して使うところもあります。また、昼間はテニスコートとして使い、夕方から、奥様方が帰った後でフットサルコートに替えてやっているところもあります。銀座などの一等地にポンと建っているようなところも中にはあります。

2006年になるとその辺の整備がはじまって、日本フットサル施設連盟が設立されます。今では200以上の施設が加盟しています。529のうちの200ですから半数に満たないくらいの施設が加盟をされている状況です。東京では現在24施設が加盟されています。

現在の東京の状況

1) 組織

現在の組織形態は次の通りです。サッカー協会の中で、フットサル専門のセクションがあります。委員長、副委員長がおり、委員は各部会の部

会長になっていただいております。中塚さんは現在第2種部会長、三枝さんが女子部会の部会長です。他にもサロンの会員で、徳田さんが3種の部会長として入っておられます。1種部会長の村木さんもサロンの会員ですね。委員長の梶野さんもサロンです。というような形式になっています。

フットサル民間施設の台頭

•フットサル施設の増加

民間施設
公共施設
テニスコートの空き時間、屋上等
空きスペースの有効活用



アディダスフットボールパーク渋谷

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

日本全国における フットサル常設施設数推移

年度	常設数	累計
1994年	10	
1995年	14	24
1996年	17	41
1997年	15	56
1998年	14	70
1999年	17	87
2000年	20	107
2001年	29	136
2002年	48	184
2003年	75	259
2004年	97	356
2005年	95	451
2006年	78	529
合計	529	

2006年12月スポーツクリエーション調査
引用：日本フットサル施設連盟ホームページ

39

フットサル民間施設の台頭

(2006年)

• 日本フットサル施設連盟の設立

200以上の施設が加盟
東京所在24施設が加盟



<http://www.j-futsal.net/>

フットサル常設施設数

	施設数	面数
全国	529	1,207
東京	74	157

2006年12月スポーツクリエーション調査

引用：日本フットサル施設連盟ホームページ

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

40

大会を実施する部隊としては、各年代、性別に応じて部会を作り、そこが実施委員会を兼ねるといった形式にしています。また、競技会を開催するとマンパワーが必要になりますので、教育的な見地から幹事から一元化してやりましょうということで、運営部というセクションを設置して、そこに人材を貯めておいて、必要なときに来てもらう仕組みを作っております。

2) 事業

現在、委員会主導では、第1種では全日本選手権、第2種が、夏の東京都フットサルチャレンジ U-18 と、冬の

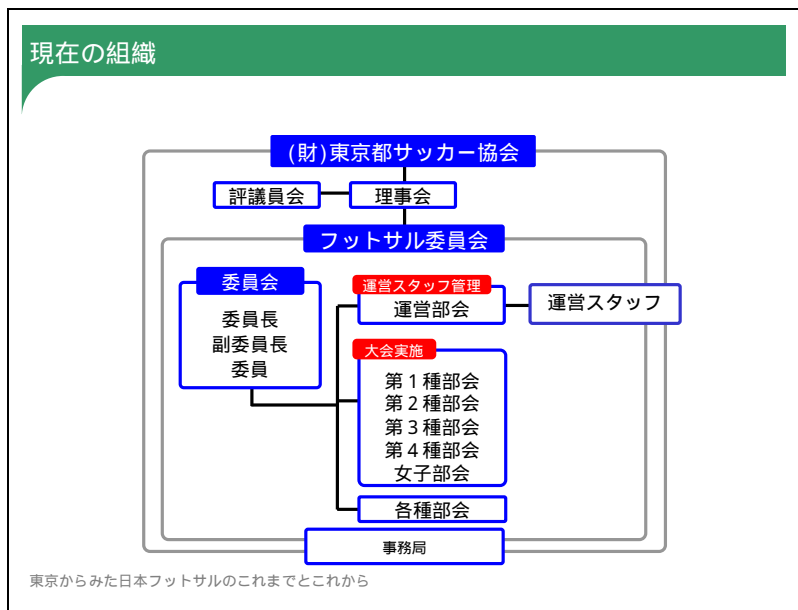
東京都 U-18 フットサル大会の2つの大会を行っています。今年からプレでやっているリーグ戦も、来年からは第2種リーグとして協会の事業として始めることとなります。こちらはJFAのトライアルFA制度というものを活用しており、立ち上げ資金として補助金をもらってやっていく施策になっています。基本的には、既存の2つのユース大会に出ていたチームの中で、これだけでは物足りないところが出てくる予定です。

第3種も全国大会の予選と、冬にU-15大会を行っています。駒沢など、2面を取れるところを確保してやっていくようなやり方で、冬はU-18と15を同時に3日間、同じ会場でこなしています。まずは実施する方を優先しており、両大会とも32チーム程度出場している状況です。

第4種の少年は大会が1つしかありません。お正月に毎年行われる全日本少年フットサル大会の東京都予選大会です。勢力図としては、ヴェルディのジュニアチームが強くて、他のクラブが何とか鼻をへし折ろうと頑張っているような状況ですけど、毎年ヴェルディが勝っているような感じです。各年代を通して出場チーム数が一番多いのはこの大会で、150チームを超えたくらいです。少年のカテゴリーだとフットサルだけをやっているチームは多くなく、サッカーをやりたいかつこっちも出たいというのが多いです。これは東京だけに言えることではなくて、全国的な傾向です。まずは両方やってみてということで、指導者の意向が大きいようです。たまたま入ったチームでフットサルをやっていたところが出場している感じがしています。

女子は、全国大会の東京都予選、今年まで「ティファール・カップ」と呼んでいた大会と、オーバー30のフットサルフェスティバルを行っています。これとは別に、東京都フットサル連盟の中に女子リーグがあり、女子は女子で年間活動するチームがあります。先ほどの棲み分けのところ、選手権は協会（委員会）がやりますよということでやっている状況です。もちろん、競技志向の上手い人だけ、やりたい人だけがやればいいやということではありません。多くの方に出場してもらえる機会をつくらうということで、O-30のフェスティバルができました。年齢的に衰えを感じるのが30歳を過ぎたあたりではないかということで、楽しんでやらせようという位置づけです。今年は3月15日に駒沢で行う予定です。参加チームは16で、そのうち10チームは楽しんでやる人たちで、他の6チームは競技志向で順位を決めてやりたいというチームです。今回はこのようなリクエストにお答えして、総当り戦をやった上で順位決定戦をするというやり方を取っています。参加者の声では好評ですね。あまり世間には知れ渡っていませんけど。

フィスティブアルということでは、JFAが全国的に展開しているJFAファミリーフットサルフェスティバルというものもあります。これは、お父さん、お母さん、子ども2人ともう1人は誰でもいいで



すという構成でチームを作って楽しませようというものです。ただ、こういう条件のもとで出てくるチームは東京ではなかなかありません。現在は、子どもか女性かどちらか2人以上いればいいですよと、ゆるめた参加資格にして開催しています。年間3回やっており、だいが固定化というか、毎回出られる方もいるようになって、かなり浸透してきているところだと思います。また、ファミリーフットサルになるべく近づけるように、チーム5人を作るのが難しい方、中には親子で出てきたりということで、親子フットサルフェスティバルというのを、ファミリーフットサルの時間の前に2時間くらい使って開催しています。親子なので、お父さんと小学生の子どもでもいいですし、60歳のお父さんと40歳のお子さんでも構わないわけです。ファミリーフットサルには出られないけど楽しんでもらう、あるいはファミリーフットサルがあるので今度はこっちに出たいと思わせるような仕掛けを作りたいと思ってやっているのですが、なかなかうまくいっていません。

この他、主管大会として、今年はPUMA CUP 全日本フットサル選手権大会、バーモントカップ全日本少年フットサル大会、全国青年大会というのがありました。あと、この前終わりましたFリーグ。試合が東京であるときだけなんですけど、運営スタッフの登録・派遣を行っています。

運営スタッフの仕事自体は、そう難しいものではないのですが、それでも毎回ゼロから作業を教えていると積み重ねがないので、なるべく定期的に来ていただいて、そういう人たちをあらかじめ登録して派遣していきこうということで、運営スタッフ登録・派遣制度を始めました。2005年から取り組んでいて、まだ日が浅いんですけど、現在100名の登録者が、年間60日くらい活動していただいております。

右の写真は青木運営部会長です。専門学校の先生をしておられる方なんですけど、出席率が8割を超える素晴らしい人で、今彼なしでは考えられないです。

現在の事業状況

•運営スタッフ登録・派遣

(2005年)

当協会フットサル委員会に「運営部会」を設置。

(2006年)

運営部会の管理の下、マンパワー確保のため年度単位で活動する運営スタッフ登録を開始。委員会内の専門的セクションとして、運営スタッフのマンパワーの確保及び専門知識教育を進める。

また、各種大会にはこの運営部会に登録した運営スタッフが派遣され、大会運営を実施。



東京都フットサル連盟スタッフ
TOKYO FUTSAL OPERATION STAFF



東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

Fリーグ開幕

2007年9月にFリーグが開幕し、総入場者数が15万人を超えたということで、興行として成り立っているかは別なんですけど、にわかな盛り上がりを見せています。開幕戦の時には、開門前の入場口にはかなり人が殺到して、スタンドも満員という状況でした。メディアも開幕戦ということで注目があまして、かなりの数が来ていました。

開幕戦なので開幕セレモニーを行いまして、ヘリウムガスが入ったバルーンを浮かべ、そこに映写機で投影して不思議な空間を作りました。ピッチ上に選手がぐるっと回っているのですが、これはフラッグと、今COOの大仁邦彌さんがぐるっと回っているところもありました。

Fリーグをやっている中で、ちょっとどうなの？って思うところがありました。先ほど、東京都フットサル連盟を組織するところで申し上げた、「連盟は東京のフットサルを管轄するところではないだろう(協会・委員会が管轄すべき)」という指摘を踏まえてFリーグが掲げている4つの理念を考えたところ、これはどうなのだろうと思うところがあります。「日本のフットサルを強化し、競技レベルを向上する」というものは、Fリーグだけの話じゃないのではないかと。また、「日本のフットサルを普及し、競技人口を拡大する」というものも、Fリーグをやったから競技人口が増えるのかといたら、

違うんじゃないと思うんです。そういったところの整合性が、身内の中でも取れていない状況です。

実はこういう政策を考えている人がいるような、いないような状況で、こういう事態を招いているのではないかと、身内として思う次第です。

フットサルの今後

最終的に今後どうなっていくのかということ、最後に取り上げたいと思います。これまで10年ほどやってきた中で思うのは、競技性と普及性ということと同じ土俵の上で同じように考えてやっていくのはなかなか難しいということです。

競技性という部分では、普通にフットサルをプレーする人たちの中では全く必要ないようなことが、競技を追求するために、競技規則(の厳密な適用)だったり、ユニフォーム(正副2着用意すること)だったり、懲罰(出場停止試合が複数に及ぶということなど)であったり、いろんなことをしっかりとやっていかないといけない。それが、初めて参加された方に対しては非常にハードルが高く感じられる部分じゃないかなと。これは、出場されると痛感するんじゃないかと思います。フットサルは12人までベンチ入りできるので、ユニフォームを12人分、2着ずつ用意するだけでも非常に負担になるでしょう。それを当事者である中学生や小学生に負担させるというのはちょっと難しいのではないのかなと。このことが、普及のスピードを弱めているような気がしないでもないし、その辺りを緩和するのに、普及性ということで、ゆるめた何かできないかなと。たとえばユニフォームを正副両方でなく1着だけでいいとか。さすがに懲罰はゆるめられないんですけど、参加しやすいような仕組みを作って、上手くそれを公式化、ルール化できるようなやり方をできればと。どうしても競技性のところだけで割り切ったところというのは、フィスティブルと名の付いたものしかないものから、その辺を上手くできないかなというところが課題であり、悩ましいところでもあります。

話があちこちに及んでしまったのですが、東京のフットサルとしては現状はこうなんですけど、今後どう行った方向で行けばいいのかということで、皆さんからいろんなご意見をいただいて、今後活かせたらなと思いますので、いま話を聞かれた中で、何でも結構ですので、おっしゃっていただければと思います。よろしく申し上げます。以上です。

フリーグ



日本フットサルリーグ(Fリーグ)の理念

- 日本のフットサルを強化し、競技レベルを向上する。?
- 日本にフットサルを普及し、競技人口を拡大する。?
- 世代や性別、地域や所属を超えた交流のできるフットサルコミュニティを創出し、国民の心身の健全な発達へ寄与する。
- フットサルを通じ、国際交流を行い、国際親善に貢献する。

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

53

フットサルの今後

● 競技性と普及性のすみ分け

● 競技性 真剣勝負?

年代毎での競技を迫及した競技会(大会・リーグ戦)の実施
各全国大会予選
リーグ戦

● 普及性 遊び感覚?

ライフスタイルにあわせて活動でる仕組みづくり(レジャー的)
ファミリー・親子フットサルフェスティバル
0-30レディースフェスティバル

東京からみた日本フットサルのこれまでとこれから

54

第2部 ディスカッション

1. 質問と補足

中塚)ありがとうございます。話題が多岐にわたったんですけど、まずここまでのところで何か質問、あるいは補足があれば伺いましょうか。

フットサルのルールとラインについて

フロア) 初歩的な質問ですけど、スライディングタックルは認められているのですか。

野口) スライディングタックルはファールです。ただ、スライディングでシュートされたボールをブロックするのは大丈夫です。ペナルティの中で後ろからチャージなどをしたときに。

アークとかセンターサークルとか。当時はそのくらいでしたかね。その後でちょこちょこコーナーアークを作りなさいとか、いろいろと出てきて、ルールを変えながら作っています。

フロア) グラウンドのラインはどうしていますか。

野口) 常設のところは書いてあるのですが、公共の体育館を借りてやったりするときは、テープを持って行って引いてやっています。

フロア) テニスコートがフットサルコートになるというのは、支柱とかテニスのラインはどのようにしているのでしょうか。

野口) よく見かけるのは、テニスのネットを張っている支柱を抜いてやるところもあれば、下にキャスターが付いていて、ネットだけガラガラガラと動くところがあったりします。テニスコートの2面分くらいですけど、テニスってコートの外に結構スペースがあるじゃないですか。その外側にラインを書いていますね。あるところだと、テニスとフットサルで別の色を使っています。

フロア) あらかじめ書いてあるところもあるんですね。

中塚) ラインテープの質も、最初のころに比べて良くなってきたんじゃないですか。

野口) そうですね。最初のころはプラスチックのような曲がらないテープでしたね。もっといいものはないかと業者に聞いてみました。あまり伸びすぎてしまうと、直線を引くと伸びてしまうので。フットサルのライン幅は8cm なんです。普通の体育館種目って5cm なんです。その3cmの差のせいで、市販されていた5cmのものをを使うと2つ重ねないと8cmにはならないので、2回引いていたときもありました。いま、8cmのものが市販で出ていますが、3~4年前はありませんでした。そこはかなり苦労しましたね。

床の材質と体育館の開放について

フロア) 以前のサッカー医・科学会で、床の材質をどうするかという質問が出たんですけど、今こういう問題はどうなっていますか。人工芝でやるものも施設連盟ではフットサルと言っているのですが、医・科学研の時は断定はされていませんでした。

野口) 競技規則の中で、国際試合は確か床でやると決まっています。国内の試合は何でもいいのかというと、基本的にはフローリングのもので、材質は日本の体育館だと木皮の床だと思うのですが、Fリーグはスポーツコートと言って25cm角のタイルをバートと並べてそれを組み合わせていくものを使っています。ハンドボールも同じものを使っています。(写真を見せて)Fリーグのこのピッチは、近くに寄らないと分からないんですが、25cm角のものを組み合わせています。あと、タラフレックスというのをスペインなどでは使っていますが、1.5から1.8くらいの反物になっているものを並べて使っています。バレーボールはそれを使っていますね。

競技的に何が一番適しているかということ甲乙付けがたいところで、ブラジルでは下がコンクリートでやっているところがあるらしいです。日本の中でどれがというのは、今のところルールとしてこれを使わなければならないというのは特にはないです。ただ全国的なところではフローリング、真

っ平らなところでやるのが一般的です。

フロア) 室内サッカーでないとフットサルではない、という議論もありますが、どこまで認めているのでしょうか。

野口) 国際試合における制限はありますが、それ以外については、全国大会に準ずるところは同じ基準でやりましょうというような内規というか、何となくある感じで、実際のところそういう制限はないですね。日本協会にはフットサル運営ハンドブックを出しているのですが、そこだと室内でやるのが望ましいけど、それ以外でもいいですよ、という書き方をしています。

フロア) ミズノ千住のフットサルコートは外なんですけど、大会をやることは可能なのでしょうか。

野口) 可能は可能ですね。ただ、床の上に水をこぼせばつるつるになると思います。スポーツコートは屋内用で編み編みになっていて水がすぐ抜けるようになっています。滑りますので、主催者が判断して選手のために何がいいのかを考えないと、ケガとか事故が起こりますので。

お台場でフジテレビが「冒険王」で芸能人フットサルをやっていて、夏で夕立が降ってしまうとつるつるで、1人でバックドロップみたいになってしまって非常に危ないことがありましたね。

中塚) 公式大会は基本的に体育館でやるようにというのを東京協会は考えているんですね。

野口) そうですね。

中塚) それで最初のころは、フットサルで使える体育館がなくてすごく困っていたわけですね。

野口) 最初は先ほど申し上げた通りで、ミズノの二子玉川でやっていたんですけど、途中 97 年から府中市立総合体育館を借りられるようになって、そこから全ての大会が体育館に入っていました。駒沢とか府中、小金井、立川、青梅、そういう市町村の公共の体育館を優先利用で押さえさせてもらって、年間の活動は 60 日くらいやっているの、ほぼ全部体育館でやっている状況です。1 年の 6 分の 1 くらいですかね。

実際のところ小金井は梶野さんの力が大きかったです。梶野さんは体協の理事もされていて、小金井市役所の職員で、以前は体育課に所属されていました。体育課は小金井市立総合体育館の中にあるんですよ。それで、優先的に何か使えるとか、小金井協会さんとしても親子教室みたいなものを体育館でやりましょうという雰囲気をもとにどんどんつくっていった開放されていった良い例ですね。

中塚) 小金井が開放されたのを見て、他の体育館が倣っていったところもあるんですか。

野口) 先駆者としては府中の方が先ですね。府中には東芝の工場があって、そちらに日系ブラジル人が結構来ていて、その方々が遊びでサロンフットボールをはじめて、それを地元の人たちが一緒にやり始めたということで、市立の総合体育館だけでなく、小・中学校の開放もかなり進んでいる街です。固いボールなので、ガラスにボールが当たったらたぶん割れちゃうんですけど、そういう中でもやっていったというのはうまく行政と付き合いができて、市民の声が通るところだったというのがあるというんですね。

他のところは、梶野さんのネットワークで...。役所の繋がりがあるんです。例えば武蔵野市の総合体育館は、三鷹の北の方にあるんですけど、小金井の隣なので。梶野さんが自治体職員のサッカー連盟もやっていて、その広いネットワークを辿って、あそこあるな、ここにあるなという感じで開放するように話を持っていきました。それで大会で使えるようなところを広げていったというようなことがありました。

2. 意見交換

中塚) 話題提供者の野口さんからは東京都のフットサルを今後どうしていったらいいか、というような大命題が示されました。東京に限らなくてもいいと思うんですけど、それぞれの関わりの中で「自分の関わっているフットサル環境をどうしていったらいいだろうか」、「ここはどうなっているんだろう」、「みたいところで、フリーで意見交換できたらと思います。こちらではテーマを絞りません。参加者の自由な立場で意見交換したいと思います。

登録制度について

フロア) 個人の登録のところ、サッカーだと1種から4種・女子・シニアと管理していますが、フットサルでも管理の仕方は一緒なんですか。

野口) ちょっと違うんです。始まった当初はサッカーの登録をしていないとフットサルに出られないということだったんですけど、2年目からフットサル大会登録制度が出てきて、フットサルに出るときは年間を通じた登録ではなくて大会毎の登録としました。個人名が紙に書かれていればいい、という程度で、例えばAとBとCという大会があったら、大会毎に登録費を払って、参加申込書を出すんです。それを登録証と位置づけて、それを出せば登録したということで置き換えた、というやり方です。

フロア) そこに入る人たちが個人登録をするということですか。

野口) そうですね。現在は登録している人たちがチームを作って出てくるというやり方です。

フロア) では、個人登録をして、チームを結成して大会に出てくるということなんでしょうか。個人で1,000円登録していれば、全員で2,000円払えばその大会に出られるってことでしょうか。

野口) その他に大会登録費があって、大会によってまちまちで、1万円のもあれば、高い大会では4万円くらいのもあります。

フロア) 4種で指導しているチームが昨年、フットサル大会に出たのですが、高いなという印象を受けました。東京都の普通のサッカーだったら年間登録をしておけば全部いらないんですけど。

野口) 個人登録を500円でしていただければ公式大会に出られます。あとはチーム登録費を2,000円お支払いいただき、大会参加費が5~6000円。だから莫大な額ではないですね。

牛木) ちょっと確認したいんですけど、現在の制度となると、まず協会に対して登録するんですね。

野口) 協会に対してまず登録しておくのは個人だけです。

牛木) チーム登録はないんですか。

野口) チーム登録は、大会ごとです。

牛木) サッカーの場合はチーム登録も個人登録もありますね。だけど、フットサルの場合はチームとしての登録がなくて、個人登録のみなのですか？

野口) 年間はそうです。個人が協会に直接登録をします。

牛木) 直接登録した選手が集まったチームが大会に登録すると。そこでまた、お金がかかる。例えば、リーグがあったらリーグに対する登録費が出てきて、その他に大会に参加するための大会参加費がかかるんですね。

野口) そうです。

牛木) それはチームとしての参加費ですね。分かりました。

野口) サッカーだと加盟登録を年度単位でされるじゃないですか。そうするとみんな自己意識というか、そういうのが出てきていいんですが、フットサルはヤドカリの的で、その場に参加しに来るだけなんですよ。リーグ戦意識というか、始めた当初はやっぱり参加するだけで、サッカーだと自分でゴールを運んだりするのが当たり前だと思うんですけど、そんなことをする人はあまりいませんでした。場所をこっちで作ってあげて、どうぞってやってあげないとやらない状況だったので、協会とするとかなり手間がかかっていました。だからそのあたりを自分たちでやれる環境をもっとつくりましょうと。これが連盟を作り上げた1つの理由でもあります。

中塚) 実際、大会ごとのチーム登録制度は素晴らしいと思っているんだけど、その後個人登録でお金がかかるようになってきたとき、グリーンとハードルが高くなったのかという気がしています。

高田) 追加の質問ですけど、さっき4種はサッカーを主体としてフットサルをやる人がいるとおっしゃっていましたが、その場合は二重で登録しなければならないのでしょうか。

野口) はい、そうです。二重登録ですね。

高田) どこまで大会の時に登録なんですか。例えば関東リーグってあるじゃないですか。連盟によって違いますよね。東京の大会は大会毎で登録費と参加費を払うとか。

野口) そのあたりまでいくと複雑ですね。理解しづらいかもしれないですけど、協会として言っているのは大会登録制度なので、今申し上げていたやり方だけなんですけど、それに連盟とかリーグ戦の考えが出てくると、連盟に加盟しなければならないので、加盟登録の手続きが出てくるんです。だから、リーグ戦とかカップ戦に、その大会の大会登録はしてもらおうんですが、その前に連盟の会員になってもらう加盟手続きをして、年間の登録料を払ってもらっています。それは連盟の中で決めてやっているのだから、こちら(協会)としてはタッチしません。だから、リーグ戦になると、もう一つ登録をしなければなりません。

サッカーだとサッカー協会が直接チームから受けるということはやらないんです。間に連盟が入ってきます。大学連盟とか社会人連盟とか、そういう連盟が入ってきて、チームをまとめてくれた上で協会に上げてくるんです。だから直接チームとやりとりをするというのはあまりないんです。

高田) フットサルの場合は東京都ですか。

野口) これは全国共通です。日本協会まで上がっていく仕組みがサッカーの方はあって、チームが連盟に出して、連盟が都道府県協会に出して、それを事務局に上げるというやり方をやっています。フットサルの個人登録は、始めるときに議論があったんですが、直接日本協会が受けてキックバックで都道府県協会に1人幾らで落とします、というのでやっています。仕組みがサッカーと異なっているので分かりづらいのが現状です。

中塚) サッカーの場合は年度初めに、この1年間はこういうチームで、こういうメンバーでやりますよという形で、また大会もかっちりしているからそれですとやっているわけですね。それがフットサルの場合は、競技会毎にいろんなチームを編成するので、今回の大会はこういうメンバーでエントリーします、別の大会は別のメンバーでエントリーしますということが出来るような制度になっているわけです。この素晴らしい制度のおかげで、例えばU-18大会でも、うちの学校のフットサル部門、サッカー部の人たちが参加できるし、野球部とテニス部の友達同志でチームを作って、東京協会の公式大会に参加することもあったんです。そいつらの方が強かったりして(笑)。

だけど、これに加えて個人登録という話が出てきて、プラス1,000円、野球部やテニス部の人たちも払わなければならなくなったときに、そういう動きはちょっと見えなくなってきたかなという気がするんですよ、U-18に関しては。

牛木) それは普及面に重きを置いた話ですよ。個人登録については、サッカー協会会長の川淵さんの考え方に矛盾しているところがある。1つは個人登録することによって、サッカーファミリーを広げようと普及面の考えでやっているけど、金銭的な負担が増えて、普及の妨げになる面もありますね。本来登録というのは、1つの競技会に参加するために二重登録を避けるためにやるものだと思います。それが協会の収入を増やす手段になっているのは、おかしいと思うのですがどうですか?

野口) それはありますね。

審判の問題

野口) これはフットサルの選手に限らず、他にもあります。例えば審判です。サッカーをやる人はサッカーに登録してもらおうし、フットサルの審判制度も別にあるので、両方やる人は両方登録してくださいとしています。だから、みんな1回登録すれば出られますよ、というものではなくて、考えとしては、サッカーとフットサルの両方やるのなら両方登録してくださいという、ご指摘の通りなんですよね。両方とも登録しなければならないということです。

中塚) そのあたり、審判の方からどうですか。

菊池) 審判員の話ですけど、実際私はフットサルの審判とサッカーの審判をしています。(その後聞き取れません)・・・。だいたい土曜日が多いんですよ、フットサルは。日曜日はサッカーの審判で

す。

フロア2) ライセンス制度っていうのはどうなんですか。

菊池) ライセンスはやはり、4級、3級、2級、1級です。

フロア2) ちなみに東京だけで、どれくらいいるんですか。

野口) 私も数字が頭にはないですけど、サッカーとフットサルの両方を合わせると2万人くらいになると思います。

高田) 審判の数は足りていないですか。例えばサッカーだったら、東京都の公式戦だったら4級以上の審判がやらなければならないとなっています。フットサルの場合、先ほどの設置の話のように、主催者側が審判も用意をするのでしょうか。

野口) それを回すのが一苦労なんです。サッカーの場合、そういう仕組みを連盟でやっているのできていますが、フットサルの場合は、協会が場所を作ってあげて審判も用意するというやり方をずっと取ってきています。ただ、上に進むともちろん、例えばカップ戦は主催者側が用意して、リーグ戦はお互い帯同審判で出し合って成立するというのはあるんです。ユース大会だと、仲間内の先生がいると学生さんに準備をしてもらうことがあるんですが、さすがに審判まではやってもらえません。よく筑波大附属の生徒さんには最後まで残って片づけを手伝ってもらっています。

高田) ライセンスを持っている人が絶対やらなければならないということはないんですか。

野口) 公式戦ではライセンスは持っていないとできませんね。公式戦でなければ資格はなくても審判はできますよ。

高田) Fリーグを今年何回かみたんですけど、サッカー以上に審判がつらそうでした。ガーっとボロクソに言われて、レッドカードは出ないのかなという感じでした。サッカーだと遠いから分からないのかもしれないんですけど。

野口) サッカーも相当言っています(笑)。

高田) サッカーならカードが出るような場面で、落ち着かせてやっていただけ、とにかくずっともめているんですね。ジャッジの質が悪いのか、そういうことを言うのが普通になっているのか、分からないんですけど。

野口) サッカーで言うゴール前の環境がフットサルではずっと続いているわけで、絶えず接触プレーが出てくるのは避けられないんですよ。だから、そこを審判が見抜いたり、そうなる前に押さえるとか、そうでもしないとエスカレートして荒れちゃいますよね。そこを審判の裁量で押さえられるかという、笛だけでやるのは難しいですね。ヴォイスコントロールで会話しながらやっている方は上手ですね。よく3級とか4級の方で、警察官みたいにピッピ、ピッピやって終わっちゃう人がいますが、それだとだいたいもめますね。

峯山) サッカーで小中高のちゃんとした公式のリーグ戦をやってきて、審判に暴言を吐かないようにと指導されてきている方はいいのですが、フットサルの場合は選手の質が悪いというのがありますね。Fリーグの場合、外人監督が多く、選手をあまり上手くコントロールできていないのかなというのがあります。Fリーグでお客さんがいっぱい来ている環境で、そこで審判に暴言を吐く選手がいたら、応援に来る方がなくなっちゃうと思うんですよ。選手がまだアマチュアですけど、なんとかしなければならぬでしょう。

高田) 子どもたちに真似しちゃいけないとぼくは言いましたけど。まあ、これから成熟していくことを期待しています。

中塚) 民間施設でフットサルの競技運営をやってこられた川前さんが来ているのですが、大会を企画するときに審判はどうされているのでしょうか。あそこに行くところくな審判がいらないからという評判が出ると、民間の場合は収益にも影響してくる。そのあたり、民間の立場でいかがですか。

川前) 審判の問題だけに特化して言うと、社員が平均1人か2人、契約が1人いるかいらないか。それにアルバイト5~6人です。そういう体制なんです。みんな審判できるんですよ。資格はないです

けど。つまり、そこには問題があって、資格を取るチャンスがない。フットサルを5年くらいやっている、資格がなくても整合性が取れるんですよね。さっきおっしゃった話にも繋がってくるんですけど、ぼくは審判の資格を持たずにリーグで笛を吹いたんですけど、「君、上手いね」という逆転現象が起きました。

中塚) 施設の人が審判の資格講習を受けに行けないというのは、どういうことなんですか。

川前) それは仕事があるからです。土日でしたっけ、講習があるのは。

野口) 基本的にはそうですね。

峯山) 某Jクラブが運営しているフットサル施設は、それは神奈川県川崎なんですけど、Jリーグの中でやっているの、審判が2人いなければならないのに1人だったりするんです。カードを出さなければならない場面でも、ファウルをした人もプレーを楽しみに来た参加者なのだから、カードを出したり退場させるのはかわいそうだと思います。指導者として、選手(子供)を率いて大会に出場している以上、教え子がケガをする危険がある状況は納得出来ません。何でこの人がお金をもらっているのかなという人が多いです。そういう意味で、競技の普及に審判の質が含まれているのだろうと思われま。

フロア) このことでいいですか。フットサルというのは、すごい可能性をもっているんですよ。個人登録なんかなくても、今後予想されるのは、小学校とかで体育をどんどん削っていく中で、放課後はどんどんフットサルをやるという環境になりつつあるんですよ。民間でも早いところは手を挙げて、うちはコーチも付いていますよと、囲い込みではないですけど小学生から集めているんですよ。そうすると、午後の時間はずっとフットサル教室とかで、午前中はそのコートが開いているため、お母さんたちのダンスレッスンとかで使えばいいのです。

いま、フットサルコートありきなんです。だから、10数年前に発足したときとは逆転していて、フットサルコートを作って、その後人を集めて、そういう人たちは個人登録もしていないし、自己完結でリーグ戦もやっている。たまたま大会に出たいって盛り上がりれば、単年度だけ登録するような印象があります。だから、なんて言うのか、取っつきやすいけど、一度心が離れるともう二度とそこには行かないよ、という危険性をはらんでいるので、もっとハードルを低くしてあげると、子どもの教育にもよいのではないかなと個人的には思っています。

野口) 審判は、競技で勝ち負けを付けていこうとなると、AチームとBチームで試合をしたら、ファウルをして得点になっちゃった。それがファウルなのかどうなのかを、自分たちで判断できないから審判を置きましょうというところから審判という制度ができたのが、サッカーでもともと出てきたところなんです。白黒付けなければならない場面が出てきたときに審判が出てきたので、遊びとか、レクリエーション、レジャーだったらなしでもいいと思います。峯山さんがおっしゃるように、取るところは取る、やらないところは流してもいいよ、というのはそういうところで、必要なところは必要ですし、体育とか余暇で考えると、セルフジャッジでいいと思います。それが制度としてどうなっていくかと言いますと、競技的な問題から難しいんじゃないかなと思います。もちろん最後に言っていた普及性の問題で、どのようにやっていくかというところは、今のお話はヒントになるのではないかとということで、また考えたいと思います。

フロア) 実感として施設は増えているんですよ。Jクラブなんかでは、大きいサッカーの箱を作るなら、フットサルコート2面くらい作って、そこに行けば、サッカーないしはフットサルができるんだっていう認識を持たせることができている。その後どっちにいくかは、その子自身だと思うんです。社会人を見ても思いますね。社会人リーグでやっていた人が、30歳くらいになってフットサルの方に出はじめています。あの選手は、あそこにいた人だっていうのがいます。プロ野球選手がリタイアしてゴルファーに変更するのと似ているのかなと思います。だから、いろんなところからフットサルに入ってくるのかなと、そんな印象がありますね。

フットサルとフットボール

野口) 特に大人になると、競技的なところだと、フットサルをやっていこうか、サッカーに専念してやっていこうかと、選択するところが出てきますが、高校生から下の年代はまだ自分でどうしようというところよりも、指導者の部分が大きいです。ボールを蹴るのが、サッカーとフットサルのボールの違いはあるにしても、フットボールをしているわけです。今日はフットサル、今日はサッカーっていうのを上手くやっていって、上手く吸収できるところをやらしてあげることがプレイヤーにはいいことなんじゃないかなと思います。ただ、サッカーのクラブしかない環境だったらサッカーしかやらないでしょうし、体育館やグラウンドの隣にフットサルコートがあればフットサルをやるでしょう。昔だったらよくミニゲームをやったりしましたが、そういうのがフットサルと考えるのかどうなのかと、フットボールをどう考えていくかだと思っんです。駅の近くにフットサルコートがあって、フットサルという意識ではなくフットボールをやりに行くというもので、レジャーとしていいのかと。

牛木) あるブラジル人のフットサルのコーチに聞いた話なんです、ブラジルではある年齢になると、フットサルチームがスカウトしてきて、そこでフットサルをやるかサッカーを続けるかを決めるそうです。それで、フットサルをやってた人がサッカーのプロになるのは可能だけど、サッカーしかやってこなかった人がある程度の年齢になってからフットサルのプロになるのは無理だという話でした。そのコーチは、フットサルとサッカーは別のスポーツという考えなんですね。先ほどサッカーのためにフットサルをやるんだというお話しがありましたが、日本ではそう考えられているかもしれませんが、ブラジルでは違うようですね。

峯山) 普通に考えて、小さい子は筋力がないので、あの大きなサッカーのグラウンドで、フットボールよりでかいボールを蹴るといのはまずおかしい話なんです。ただ、ピッチの大きさがフットサルのだいたい5倍です。人数が11人と多くても、走る距離も多ければ、ボールを飛ばす距離も全然違うんですよ。何が言いたいかというと、無理して大きなコートで、昔のイングランドのようにキック&ラッシュのサッカーをするのではなく、みなさんゴールデンエージはご存じだと思うのですが、技術が一番身につく時代に、小さいコートでやっていく。そして、大きくなって筋力が付いてきたら、7人制、8人制、そして最後に11人制をめざしていけばいいと思います。

牛木) 基本的には今おっしゃったとおりだと思います。それで、ブラジルでどうかということ、子どものときには11人制だとか5人制とは言っていないんです。ただ遊びでやっているだけなんです。遊びでやっている中で、上手な子が、12歳くらいになったときにフットサルにいこうかサッカーにいこうかということになり、スカウトを受けるわけです。だから、非常に日本と事情が違うわけです。

ここまで出た話を整理して考えると、3つの問題があるわけです。

1つは、管轄権の問題です。少人数のサッカーが出てきて、それが組織化されてきたということがある。そのときにFIFA会長のアベランジェがブラジル国内のサッカーの権力争いからんで、少人数のフットボールをFIFAに取り込んだといういきさつがあります。もともとブラジルでサッカー協会とは別に組織化されていたフチパウ・デ・サロン(サロン・フットボール)があった。それを握っていた人物と対立していた。そこで、アベランジェは、あらゆるボールを足で蹴るものはFIFAがやるんだと主張したわけです。それで、少人数のフットボールを組織化したのが「フットサル」になった。これが、当時ぼくらが取材したときに聞いた話でした。少人数のフットボールというのは、各国でばらばらでやっていて統一されていない。ただ、フチパウ・デ・サロンはブラジルでは組織化されていたわけです。それで、FIFA以外にフットボールをやる場所が出たら困るということだったわけです。いま日本で、フットサルを管轄するのは、サッカー協会かフットボール連盟かということになっている。それが管轄権の問題です。統括するのは誰かということが1つの問題として挙げられます。

それから、さっきから問題になっている普及性と競技性。これが2つ目の問題ですね。普及のためにはどうしたらいいか、競技性を上げるためにはどうしたらいいか。それから、サッカー協会、あるいはフットサル連盟との関わり方をどうすればいいのかということが、東京都のフットサルの将来をどのようにするべきかということに関わってきます。

そして3つ目が、さっき言った、フットサルとフットボールが子どもの成長過程でどういようにならばいいのかということです。審判の問題も結局は似たようなところだと思います。

野口) 審判の問題はどの競技でもついて回るものですからね。それはフットボールだけじゃなくて。川前) 民間施設にアンケートをとったんですけど、民間施設で競技志向の方は5%未満でした。同じようなレベルの人たちとやりたいというのが1番多く、2番目は日程でした。3番目は場所で、近いとか、集まりやすいところでした。4番目がクラスでした。レベルとクラスの違いは、レベルは強い、弱いということなのですが、クラスというのは、30代とか、男女混合とかの構成ですね。次が商品の内容。その次が審判の質です。競技志向の場合は東京都サッカー協会、楽しみたいのであれば民間施設。

フットサルの指導者

フロア) 指導者問題というのも、考えなければなりません。サッカーでは指導者の部分にも力を入れていますが、フットサルの場合は全くないのを自分は感じています。

フロア) ちなみに峯山さんは、ブラジルのフットサルの資格を持っていますよね。

峯山) はい。

フロア) フットサルの資格ですか。

峯山) サッカーと両方取りました。

フロア) サッカーとフットサルの資格は分かれていますか。

峯山) 分かれています。ブラジルサッカー協会とフットサル連盟は、ブラジルでも分かれています。州毎に分かれています。日本で例えると、日本フットサル連盟でもライセンスがあり、東京都でも独自にライセンスがあるという事になります。スペインでも一緒です。スペインで指導者の勉強をしてきてライセンスを取った者がいるんですけど、その人はスペインの中のムルシアというところでした。

日本の中でまだフットサルの指導をどうするべきかと導ける人がまだいませんよね。昔だったらクラマーさんがいて、そこから多くの人がドイツに渡って、日本サッカーの方向性のようなものができ、同時に指導者としてのあり方等もできて、数年かけて現在の日本サッカー協会のライセンス制度ができ上がったんだと思います。まだ日本フットサルの歴史は浅いので、現在の日本サッカー協会のサッカー指導員ライセンスと同等の物を作るのは難しいと思います。

牛木) 今フットサルの指導者の講習会というのはやっているのですか。

野口) 実際のところないです。フットサルだけの資格はなくて、いま作ろうとしているところです。

いつできるという明確な話はないんですが、やろうとはしているようです。ただ、その情報は私のところには来ていないんですけど。

高田) 巷にフットサルスクールというのがあると思うのですが、そこでは何をやっているのでしょうか。フットサルにはどういうトレーニングがいいのかとお思いですか。

峯山) 実際にFリーグで教えている人が指導しているということは聞きます。

高田) それはスポット的ですよ。そうではなくて、スクールみたいなもので、定期的に指導を行っているのは。

峯山) あると思いますよ。スポンサーでフットサルの会社があって、そこからスポンサーしてもらっている関係で選手を派遣してコーチングをしているということは聞きます。

高田) 普及を支えている一般の施設で、Fリーグの選手ではない人たちが、サッカーもそうだと思う

んですけど、資格を持たない人たちがやっているスクールが多いんじゃないかなと。

峯山) 受ける側が満足しちゃっているんじゃないですかね。例えば、フットサルの指導者資格がないじゃないですか。じゃあ誰に教わったらいいのかとところがあって、1番は有名選手。やっぱり肩書きです。指導者資格があればいいのですが、それが無いものですからどこか強豪チームでプレーしている選手が教えてくれるんだと。それでFリーグだとか関東リーグでプレーしている選手が。バルドールの選手と話をする機会がよくあるのですが、そこでも指導者の資質のある人しか出せないという話を聞きます。今私はヒューマンアカデミーのフットサルカレッジで指導しているんですね。そこが来期講師に高橋健介選手と市原選手に、来期どうなのかと聞いたところ、選手の契約があるので分からないと言われました。じゃあ来期高橋選手と市原選手が辞めた場合、誰が講師になるんですかと聞いたところ、今現在誰かを教えるのに適した選手はいないから...と。そこは本当に来ている選手を上手くしたいのか、ただビジネスとしてやっているのか。それで、実際に指導しているのをみてよかったから採用するのか、という問題があると思います。

馬場) 先ほどフットサルコートができてやれる場所が増えたではないかという話になりましたが、現実問題高いんですよ。採算性がまず見合わなくて、公共の施設を使うようになりました。ただ、公共の施設でフットサルに対応できる体育館というのはなくて、今まで体育館を使わせていただいていたのですが、締め出される人が出てきたそうです。実際私たちも締め出されてしまいました。いいものを提供しようとしても、実際のところ厳しいというのがあります。

おわりに

中塚) 議論は尽きませんが、時間がきてしまいました。とにかくいろんな問題がありそうだということが分かりました。もともとわかっていたんですけど(笑)。それを受けて、最後に野口さんに締めさせていただきたいと思います。

野口) 私も作業をしながら過去を振り返って何かをまとめることはなかなかしないのですが、95年から13年間やってきて、今までの足跡というか、ある程度見直せたというのは大きいのと、今後どうしていくのかというところで、プロジェクトという話も出ましたが、通り一辺倒に競技団体がこういうものだと考えていくのは間違っていると、個人的には思っているんで、またこちらにおじゃましてするのか、個人的に伺って今日いただいた意見を伸ばして話をさせていただくか。東京に限定した話になっているので、いい事例があれば、サロンのネットワークを通して、メーリングリストですとかでいただければと思いますし、競技性と普及性ということで最後掲げたところは、まだまだ行く先は分からないので、なんとか答えを出せるようなことを近々考えたいと思いますので、またその機会にはお願いしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

以上